歴史地理学　48－3（229）21～28　2006. 6

大津京跡の方格地割

吉　本　昌　弘

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．大津京比定地の正方位方格地割
　a）大津宮周辺
　b）錦織地区
　c）南滋賀地区
　d）滋賀里地区
　e）三井寺地区
Ⅲ．大津京と山陽道および飛鳥の方格地割
Ⅳ．おわりに

Ⅰ．はじめに

大津京のプランについては，木村一郎[1]，喜田貞吉[2]の条坊制を前提とした論考以来，歴史地理学畑の藤岡謙二郎[3]，秋山日出雄[4]がそれぞれ500大尺の東西8坊南北12条，東西6坊南北10条の復原案を示したが，考古学畑の林博通[5]，田辺昭三[6]らの条坊制否定論が現在のところ支配的である。林らは，狭小な湖西平野を東流する小河川が形成したいくつかの小扇状地を中心に宮殿，寺院，官衙，宅地が立地し，大津京全体は，それらの扇状地を結ぶ「点と線の都」であったことを主張している。一方，土地割に関しては，米倉二郎[7]，福尾猛市郎[8]らが40間（1町＝60間＝109m，1間＝1.8m）方格の地割が大津京時代に遡ることを指摘しており，より具体的には，小笠原好彦[9]，阿部義平[10]が穴太―三井寺間に500大尺の方格地割を想定している。

大津京の復原で最も重視しなければならないのは，西大津錦織所在の錦織遺跡である[11]。1974年の発掘調査で大津宮内裏正殿とみられる建物跡が検出され，その後図2に示したごとく内裏・朝堂院にあたる大津宮中心部分の輪郭が明らかにされてきた。この大津宮を中心に官衙，寺院，宅地が展開したはずであるが，南北に狭小な平野部であるため，林らも指摘するように，大津京プランが地形的条件にかなり制約を受けたことは想像に難くない。

大津宮に次いで注目されるのは穴太廃寺である。白鳳期創建の当寺院は，当初のN35°Eであったものが，大津京時代に至って正方位に再建されている[12]。これは，大津京の正方位地割が穴太廃寺にも及んだこと，つまり大津京域に穴太廃寺が含まれることを意味している。穴太廃寺以北では，N35°Eの条里地割が存在し，幅員約23mの条里余剰帯（以下，道代）がみられる。これが条里地割施行前からの原初北陸道にあると考えられ，創建時の穴太廃寺と同方位であることから，大津京以前に直線状の計画道路が存在していたことになる。条里地割の施行は，大津京域の正方位条里区と同じ大津京以後のことと考えておきたい。ともあれ，正方位に再建された穴

キーワード：大津京，40間方格，寺院，道代

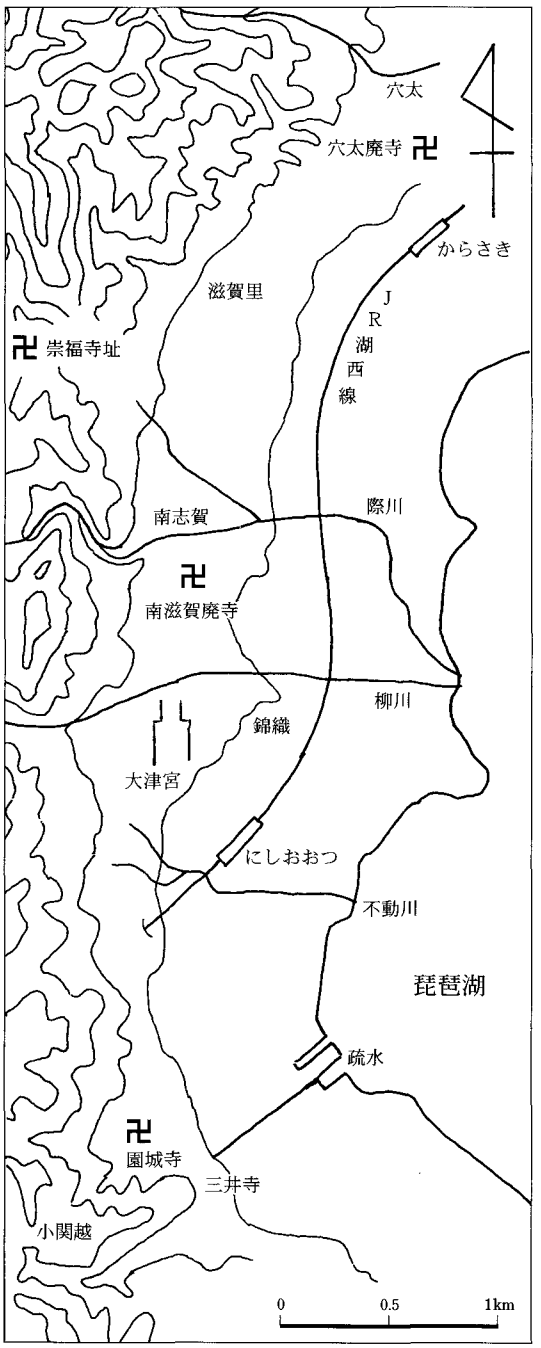

図1　地域概念図

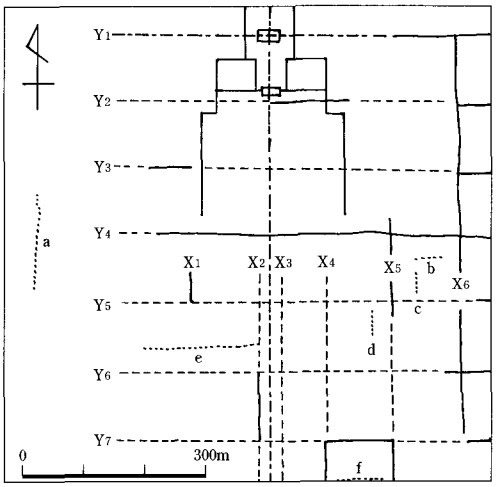

図2　大津宮周辺の条里地割
（地割は昭和42年測量の2500分の1都市計画図より摘出。大津宮内裏・朝堂院は注11）による。）

太廃寺は，大津京の北の玄関となったものと考えられる。

その他，大津京時代の四大寺に数えられる南滋賀廃寺，園城寺前身寺院が約方2町の境域を占めており，大津京プランを考える上で欠かせない寺院であることはいうまでもない。

Ⅱ．大津京比定地の正方位方格地割

大津京推定域には，正方位条里も施行されているが，福尾猛市郎[13]らが指摘するように，条里地割とは明らかに異なる正方位方格地割が存在することもまた事実である。しかし，条里地割が大津京廃都後施行されたとすれば，その基準線は，大津京プランと重複するということも念頭に置かなければならないであろう。以下，大津北郊に認められる方格地割を中心に考察を進めたい。尚，ベースマップは昭和48年測量の2500分の1都市計画図である。

a）大津宮周辺

図2は，大津宮周辺の条里地割分布図であ

る。Y_1は内裏正殿東西中軸線であるが，東西坪界線と一致するため，これを廃都後条里地割が施行される際の基準線となった重要なラインと考えることができる。南北ラインでは，大津京中軸線そのものに一致する坪界線は存在しない。しかし，その18m西に南北坪界線 X_2 が存在する。X_2 を宮中軸線を対称軸として東へ折り返した X_3 との間隔は36m，すなわち20間という完数になる。これを朱雀大路（またはそれに相当するもの）の道代と仮定すると，条里地割の南北基準線は，その西界線であったということになる。これがまさしく朱雀大路であることを証明するには，次の二つの検討が必要となる。ひとつは，朱雀大路を基準とし，条里地割とは異なる方格地割がどれだけ摘出できるかということである。二つ目は，その方格地割が，大津京時代の四大寺院，穴太廃寺，南滋賀廃寺，園城寺前身寺院や，西大津駅大溝[14] などにうまく整合するかということである。

米倉，福尾とは別に，図2の範囲で20間幅の朱雀大路の東西両界線を南北の基準線に，また内裏正殿東西中軸線を南北の基準線として，40間（73m）のメッシュをかけると，aからfの地割線を拾うことができる。そこでとりあえず，正方位の地割が存在する穴太から三井寺にかけてメッシュを延ばし，検討を加えてみることにする。

b）錦織地区

図3は，大津宮が発見された錦織遺跡周辺の方格地割を記したものである。点線が60間方格の条里地割，実線が40間の方格地割であるが，これらは整合関係にあるため，いくつかのラインで重複しているはずである。廃都後の条里地割は，いま述べたように，大津京の方格地割を基準に施行されたと考えられるため，条里地割と方格地割が重複してい

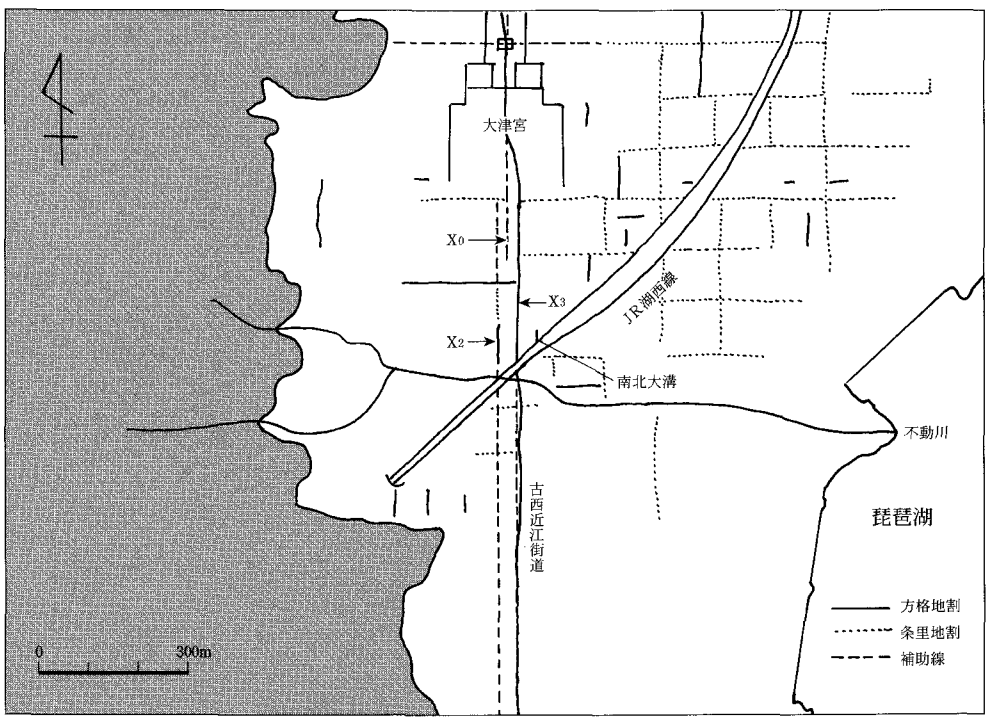

図3　錦織周辺の方格地割
（昭和42年測量の2,500分の1都市計画図より作成）

る場合には，本来は方格地割であった可能性が高いが，厳正を期して条里地割と考えておく。

40間の方格地割は主として朱雀大路に沿った古西近江街道の東側に顕著である。琵琶湖の汀線は，これよりさらに西に存在していたのではないかという見解もあるが，古代における琵琶湖の水位は遺跡等からみて現在よりも低かったものとみられ[15]，少なくとも条里地割ののる段丘面はすでに形成されていたものと考えられる。その東限界は海抜87mであり，これを当時の汀線と仮定しておく。

c）南滋賀地区

図4は，錦織の北隣，南滋賀周辺の土地割を示したものである。20間の幅員を有す朱雀大路の北延長は南滋賀廃寺によって遮断され，大津宮以北へは続かなかったものと考えられる。図の X_0 は宮中軸線であるが，これが南滋賀廃寺伽藍の東限をなす[16]。これに朱雀大路の半広10間を加えた約50間西側が西限となる。このラインに地割も2箇所で重なっている。中軸線の144m東に古西近江街道が通じるが，これを大津京時代の北陸道と考え，朱雀大路の半広10間分の道代を想定すると，朱雀大路消滅による齟齬は解消する。朱雀大路延長線の10間の余剰帯と北陸道の10間の道代は，斜向する古西近江街道A－Bで結ばれているため，これらが北陸道のルートであったと考えられる。

以上のように考えると，南滋賀廃寺は，朱雀大路分を折半して，東西50間という特別な地割をなす大津京独自の地割プランに対応した伽藍配置をとっているということになる。南北については，南大門は40間方格線の20間北にあたり，そのさらに北100間が南滋賀廃寺の北限と考えられる。また，発掘調

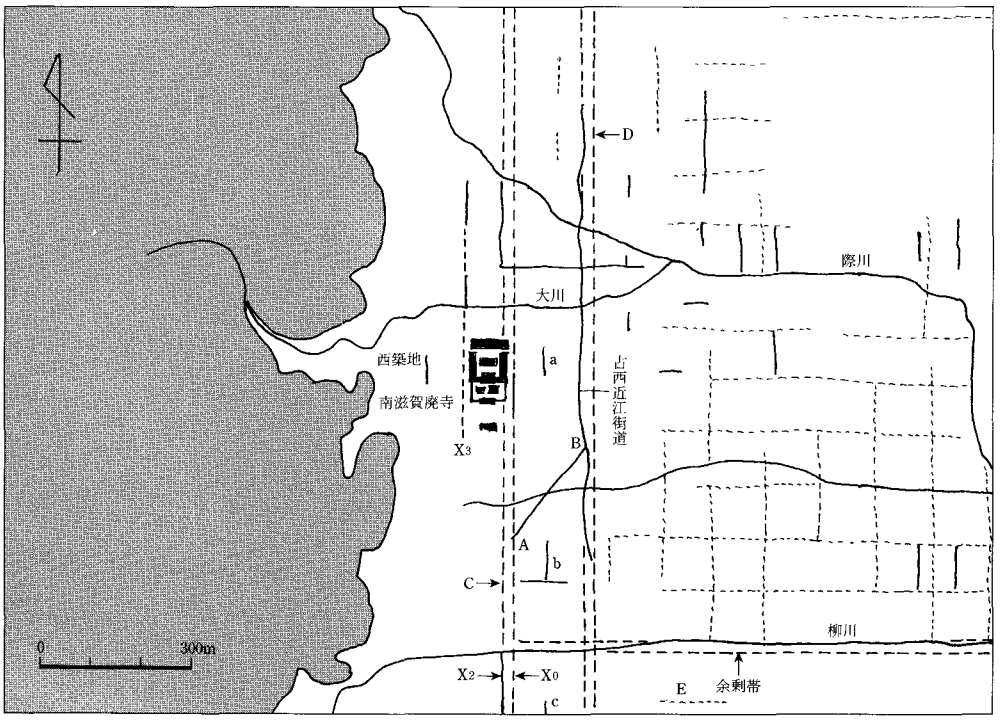

図4　南滋賀周辺の方格地割
（方格地割は昭和42年測量の2500分の1都市計画図より摘出。南滋賀廃寺伽藍は注16）による。）

査により，西築地が検出されているが[17]，これもX_0のほぼ80間西にあたる。

道代以東に目をやると，条里地割の南北基準線は朱雀大路西界線から中軸線に移ったため，方格地割との整合関係はみられない。また，Eに東西の余剰帯があり，それが東西の基準線となっているが，その存在理由は不明で，あるいは宮北限線にあたるのかも知れない。

d）滋賀里地区

図5は，南滋賀北隣の滋賀里・穴太を示したものである。穴太廃寺周辺の土地割は先述のとおりで，大津京の方格プランが穴太の地まで及んだものと考えられ，40間のメッシュを穴太まで延ばしたところ，伽藍中軸線が40間地割の中央にくることが分り，この中軸線を中心とした約方2町の境域が考えられる。そのほか，穴太・南滋賀・園城寺とならんで大津京四大寺に加えられる崇福寺への参道の一部が40間地割と一致する。筆者の述べてきた40間方格地割は宮中軸線，内裏正殿東西中軸線を基準に拡延したものであるから，一連の大津京地割であることに変わりはない。

e）三井寺地区

次に大津京の南限と考えられる三井寺周辺の状況について述べておきたい（図6）。大津宮中軸線，すなわち朱雀大路の南延長は，参道にあたる石段を経て三井寺観音堂に至るが，この地点を見定めて大津京の中軸線が設定されたものとみられる。山塊の突出部からカーブを描きながら小関越の谷口に吸い込まれるようにして畿内へ通じていたのが山陽道，大和道などを兼ねた古道であったと考えられる。大津京時代の園城寺前身寺院は，瓦の散布範囲からの推測であるが，およそ方

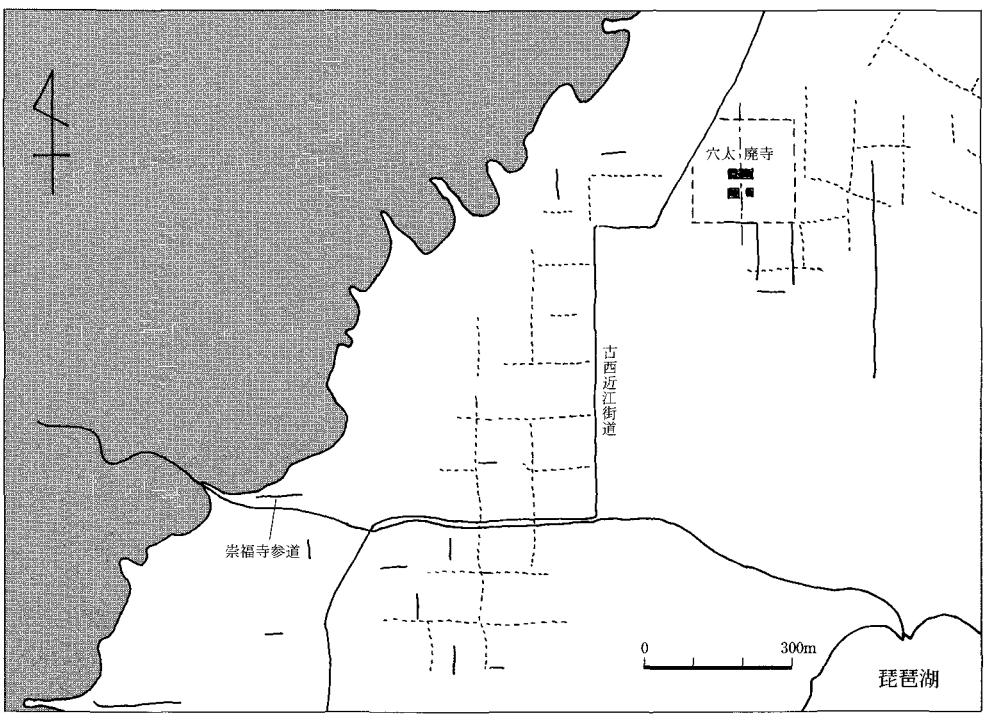

図5　滋賀里・穴太周辺の方格地割
（昭和48年測量の2500分の1都市計画図より作成）

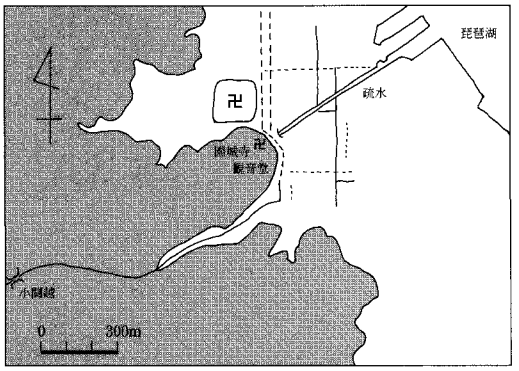

図 6　三井寺周辺の方格地割
(昭和48年測量の2500分の 1 都市計画図より作成)

120間と推定されており[18]，40間方格のメッシュに適合する。

以上，大津京時代の四大寺のうち，穴太・南滋賀・園城寺前身寺院は全て40間方格に適合することになり，崇福寺参道の一部もこれに重なることが明らかとなった。一方，三井寺の周辺にも方格地割が認められ，小関越への谷口が京の南限とみられる。

また，JR西大津駅西側で検出された南北大溝では多量の木簡が出土した[19]が，この位置も40間メッシュに一致する。

図 2 から図 6 までを縮小してひとつにまとめたのが図 7 である。穴太から三井寺までの南北に細長い平野部に方格地割がほどこされ，それに整合して，大津宮・穴太廃寺・南滋賀廃寺・園城寺前身寺院が点在したことが知られる。ただし，平野部全体に方格地割が施行されたわけではなく，立地不可能な低湿地はこれから除かれたと考えられ，先に述べたように，その限界線は条里地割東限線とほぼ一致するように思われる。

Ⅲ. 大津京と山陽道および飛鳥の方格地割

大津京において想定した40間方格地割は，ことさら特異な地割ではない。1.5倍の60間方格地割が条里地割であることはいうまでもない。ここでは，この10間，20間，

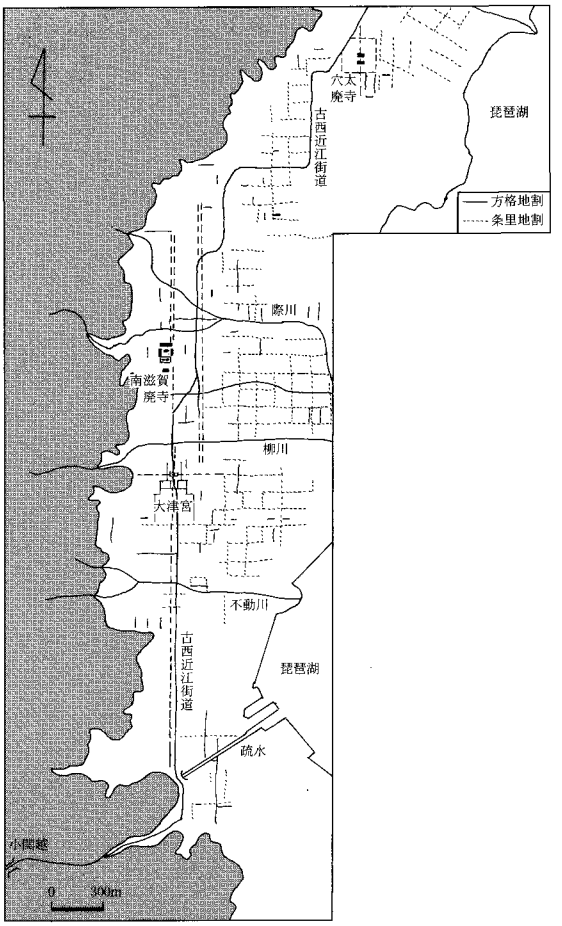

図 7　大津京域の方格地割
(図 3 ～図 6 を合成)

40間を単位とする地割が，山陰道の道代，飛鳥の方格地割などの，律令期初頭の土地計画にみられる点を指摘したい。

まず条里地割の基準となった「道代」も大津京の尺度と対応することを述べる。これまで畿内とその周辺で筆者が検出した道代のうち，主なものをあげると，山背国の北陸・東山道および山陰道が約23m，摂津国の推定三嶋路が約23m，和泉国南部の南海道が約23m，近江国南部の北陸道が約23m，丹波国の山陰道が約23m，伊賀国の東山道が約12m，近江国の東山道が約12mなどである[20]。大和国における道代は，これらとは異なり約30mであったものと考えられる。と

いうのは，現在の道代は，下ツ道で約60m，上ツ道で約30m，横大路で約30mであり[21]，中ツ道では認められないが，下ツ道が上ツ道，横大路の2倍の約60mになる以前には，中ツ道・下ツ道もそれぞれ約30mであり，大和の古道はこのおよそ30mに統一されていたものと考えるのが合理的である。これらの古道は壬申の乱の記述から飛鳥時代にまで遡るものと考えられるが，条里地割を伴ってその時代に存在していたかは疑問である。ただ，中ツ道の道代が消え，下ツ道にその幅員が加えられたのは，平城京造営に伴うものと考えられるから，藤原京時代には下ツ道が山陰道・南海道，中ツ道が北陸・東山道，横大路が山陽道・東海道として，それぞれ各約30mの道代を有していたことだけは確かなようである。先に述べた畿内およびその周辺で認められる道代は，これら大和の古道の道代の延長部分にあたると考えられる。

次にこれまで述べた「約23m」「約12m」「約30m」という数値を当時使用されていた尺度に換算してみると，約23mは令小尺8丈，約12mは令小尺4丈，約30mは令小尺10丈となる。このうち下ツ道，中ツ道，横大路が藤原京と整合するものと推測される。

ところが，摂津国および山陽道諸国で認められる山陽道の道代はこれより狭く，幅員約18mになっている箇所が大部分を占める。宮都と大宰府を結ぶ唯一の大路であった山陽道が他の諸道の駅路より狭い令小尺6丈で計画されたとするのは誤りであろう。大津京の朱雀大路を20間と仮定したが，山陽道の場合はその半分，10間として計画されたものと思われる。その道代を基準とした条里地割が60間であり，整合関係にある。すなわち山陽道の道代は大津京プランに対応していると考えられるのである。これは大宰府と大津京を結ぶ山陽道の整備こそが急がれたために，山陽道のみが大津京プランに対応したとみられる。

次に，大津京の朱雀大路を20間としたが，飛鳥についてはどうであろうか。飛鳥のメインストリートであった中ツ道の幅員は，橘寺東門と飛鳥寺西門間と考えられるが，その幅員は20間である。また川原寺南大門と橘寺北門の間隔は30間である[22]。さらに40間のメッシュをいれると，多くの畦畔が一致する。従って，大津京と同似の方格プランが想定できるかも知れないが，それは今後の課題として残しておく。

Ⅳ. おわりに

この小論のきっかけとなったのは，筆者が長らく研究している最も重要な，それ故最も古い山陽道がなぜ18mと狭いのかという疑問であった。この答は，条里地割が60間で18m（10間）の整数倍になっているためで，最も古い山陽道沿いでは，60間の条里地割も山陽道測設時に成立した可能性が高い。

その年代を知るために，大津京・飛鳥京を検討した結果，大津京では朱雀大路が20間，飛鳥京では中ツ道が20間であることを知った。これらは，Ⅱ章で述べた40間方格網を2分の1，4分の1と細分した結果として捉えることが可能であり，その地割に官衙や寺院が占地したと考えられるのである。

（佛教大・非）

〔注〕

1) 木村一郎『大津皇宮御趾尊重保存資料』，1901。
2) 喜田貞吉「大津京遷都考」，歴史地理15-1～2，1912～13。
3) 藤岡謙二郎「古代の大津京域とその周辺の地割に関する若干の歴史地理学的考察」，人文地理23-6，1971，1～15頁。
4) 秋山日出雄「『飛鳥京と大津京』都制の比較研究」『飛鳥京一』，奈良県教育委員会，1971，269～358頁。
5) 林　博通『大津京跡の研究』，思文閣出版，

2001。
6) 田辺昭三『よみがえる湖都』日本放送出版協会，1983。
7) 米倉二郎「條里よりみたる大津京」歴史と地理34-1，1934。
8) 福尾猛市郎「大津京」『大津市史』上，大津市役所，1942。
9) 小笠原好彦「大津京と穴太廃寺」『考古学古代史論巧』，伊東信雄先生追悼論文集刊行会，1990，465～485頁。
10) 阿部義平「日本列島における都城形成（2）－近江京の復元を中心として－」，国立歴史民俗博物館研究報告45，1992，1～46頁。
11) 林　博通『大津京』ニュー・サイエンス社，1974，112～113頁。
12) 林　博通「穴太廃寺」仏教芸術174，1987。
13) 前掲8）
14) 前掲11）113頁。
15) 水没遺跡の分布による。
16) 滋賀県教育委員会『大伴遺跡発掘調査報告』1983，135頁。
17) 前掲16）135頁。
18) 前掲11）135頁。
19) 前掲11）135頁。
20) 吉本昌弘「古代駅伝路における道代の幅員について」古代交通研究9，2000，45～63頁。
21) 筆者による2500分１都市計画図の計測。
22) 相原嘉之「飛鳥の道路と宮殿・寺院・宅地」条里制・古代都市研究15，1999，5～33頁。